

△
グ
リ
ー
—
楽
園
—

自動ドアの開く振動で、ケンチャヤシの細い葉が揺れてなびいた。

ドアを抜け、ヤシをくぐって、大型魚類の骨の化石にも似たモンステラの葉の向こうへ店内を見渡してみる。

窓際や壁際に並ぶいくつかの簡素なテーブル、そのテーブル同士のすき間を埋めて狭苦しく押し込まれたソファには、盤面へ粗雑にばら撒かれた駒のように点々と人の体がある。室内の照明は暮れかかった外の暗さとそれほど変わりがなかった。

かろうじて客の顔が判別できる明るさの店内へ首を巡らしていたら、相手のほうが先に気づいて「ここ」と奥のテーブルで手を挙げた。小柄な青年を目当てにテーブルへ近づいていった。

彼の前には水のグラスがひとつ。

カバンとコートをひとまとめにソファの奥へ滑らせ、向かい合ってシートへ腰を降ろす。

「一カ月……一カ月半ぶりかな。ユウちゃん、元気だったか？」

裕也は俺を見上げて小さな笑顔を作り、「うん」と首を振った。

新しい水を持ってきた店員に、俺を待っていたらしい裕也の分といっしょに飲み物を注文した。「コーヒーでいい？」と訊くと、うん、と返事をしたきりうわの空に他所を向いてしまったので、裕也に食事をする気はないらしい。

彼の視線はここから少し距離の離れた大きな窓へと注がれている。

「外、雨ふってるの？」

「それほどでもないけど、降り始めたって感じかな」

来る途中、空気を水蒸気が霧雨のように舞っていた。ここから見る窓の景色も霞の向こうで溶けかける灰色の印象画だ。

室内の暖かさに慣れてみると、そばに置いたカバンとコートがまだひんやりと外の冷気を放っているのを感じる。

「ちよつと肌寒くなつたね」

「ちよつとね……」

裕也は雨の匂いでも嗅ぐようにくすんと鼻を鳴らした。丈の短いジャケットの背を丸めて身じろぎし、くしゃくしゃと飛び跳ねた真つ黒な髪を、首に巻いた迷彩色のマフラーの中へ半ば埋もれさせる。若さと生命力に溢れた裕也はじつと座っているときでも、発電中の深海魚のように常に身体からいくらかの熱量を発している。

「ユウちゃんがこんな所まで出てくるなんて珍しいね。なにかの用のついで？ バイトはどうしたの。休み？」

フリーターの裕也は職業が定まらない。二つ三つ掛け持ちでバイトをすることもあるし、まるで仕事のないときもある。前に会ったときは確か、宅配ピザのライダーをやっているのだと言っていた。

「うん……明宏さん、仕事忙しいの」

大きめの瞳が上目遣いに俺を見た。

彼から呼び出しの電話を受けたのは昼食の時間帯だったのだが、今日はその時間にどうしても都合がつかず、仕事が終わってから待ち合わせしようとして会社近くのこの喫茶店を指定した。おれが時間を遅らせたことを裕也は気にしているようだ。

彼の気分をほぐすべく、なるべく軽い笑顔を作ってみた。

「忙しいってほどでもないけど、まあそれなり。どうしたの」

「ごめんね。無理言って呼び出したりして」

「いいよ。顔を見てうれしいよ」